

ニュース

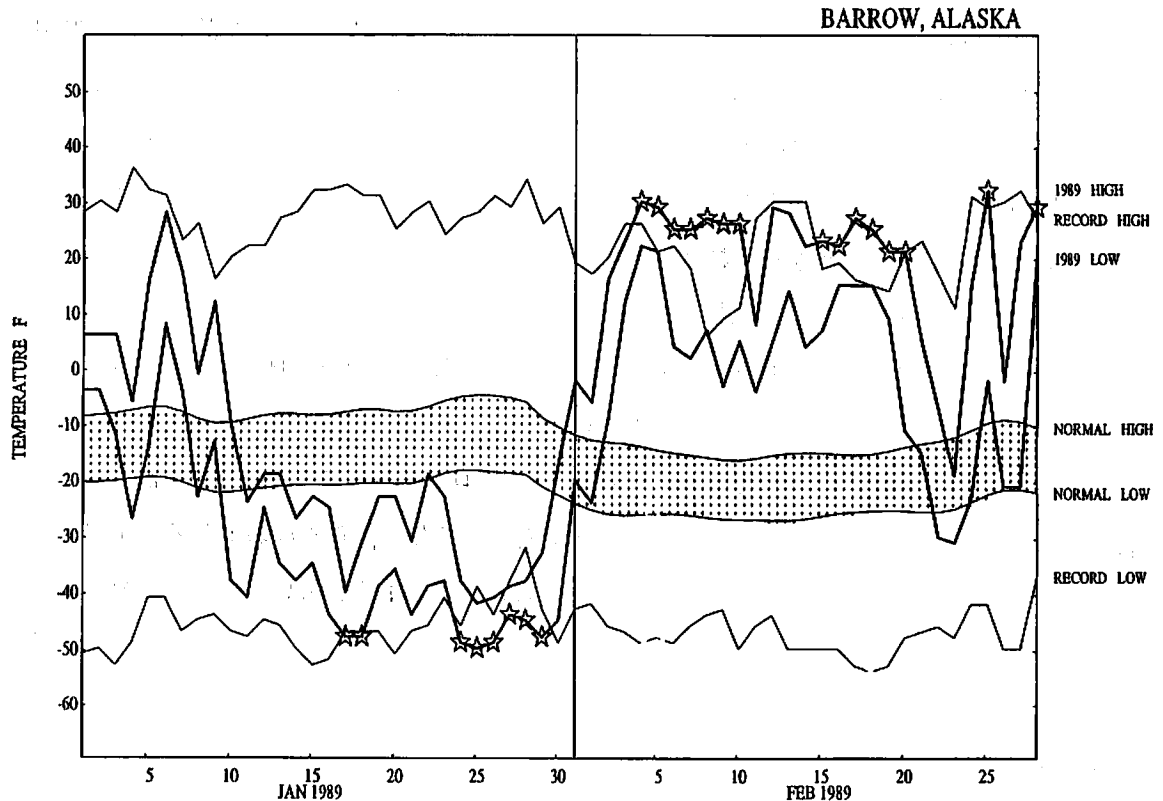
1989年のアラスカの異常な冬について

田中 博* (H. L. Tanaka)

1977年以降温暖化が続いていたアラスカは、今年1月下旬に2週間に及ぶ異常低温に見舞われ、その実況が日本にも伝えられて話題になった。地球の温暖化をむしろ歓迎していた地元住民は、忘れかけていたこのアラスカの驚異に落胆し、震え上がる者も多かった。

図はBarrow, Alaskaにおける平年の日最高最低気温（ハッチ部分）及び記録に残る最高最低気温（細線）そして今年1月から2月にかけての観測値（太線）である。記録が更新された日には星印が記してある。図のように1月下旬のBarrowにおいて、最低気温が計8日も更新された。しかし、2月始めに気温が急上昇し、最高気温が計15日も更新された事の方は実はより異常であることが理解される。この気温の急上昇と2月の異常高温は学問的に大変興味深い現象でありながら、一般市民に対するニュース性が低く報道されていないのは残念である。ちなみに12月から2月までの3ヶ月平均気温を調べると、1月の低温は12月の異常高温と相殺し、結果として今年も再び暖冬であった事を強調したい。

Prepared by: Alaska Climatic Research Center
Geophysical Institute
University of Alaska Fairbanks, AK



* アラスカ大学, 地球物理研究所

地球の温暖化は極域で著しく、温暖化の徴候としてはじめに天候の変動が増大する事が気候モデルの結果から予測されているが、今年冬のアラスカの気温変化は、それを強くサポートする結果となった。Barrow における2月平均の気温は平年より15.3℃高い。この平年偏差は標準偏差の4倍を超える値である。生起確率は約1万年に1度しか生じない確率であり、これはただ事でない。極域における気候変動の研究が今後益々重要になることは間違いなく、積極的な研究参加が望まれる。尚、データはAlaska Climatic Research Center, Geophysical Institute, University of Alaska - Fairbanks による。

編集後記

今号は、東京大学の松本さんに OLR の7年平均場にみられるインドモンスーンと梅雨・秋雨の特徴とそれらの関係について、筑波大学の川村さんには西太平洋の海面水温・対流活動・下層風の年々変動及び季節内変動についてその位相関係を中心にまとめていただきました。また、長期予報課の上野さんには古くから知られていながら関係がはっきりせず長い間埋もれていたが、最近再びホットな注目を浴びている「QBOと太陽活動と大気大循環」についてのレビューをしていただきました。それぞれ要点をすっきりまとめていただき、大変読みやすいものになっていると思います。お忙しい中、御寄稿下さいました各氏に感謝致します。

また、アラスカ大学の田中さんには、わずか一週間ほどの間に異常低温から異常高温へと180°転換したアラスカの今年の冬について特別寄稿をいただきました。春の学会のために帰国された貴重な時間を割いて、心よく寄稿して下さいました田中さんに感謝致します。昨夏の北米、そして今冬のアラスカと続けて起こった大規模なブロッキングは、大循環に関心を持つ者にとって無視できないものと思います。これらの事例研究の投稿を期待しています。

さて、すでに「天気」にお知らせしましたように、本年も9月29日(金)に「長期予報と大気大循環」の月例会を開催する予定です。まだ詳細は未定ですが、今回のメインテーマには「雪氷と大気大循環」をとりあげたいと考えております。まだほかにも、これはというテーマがありましたらふるってお申し込みいただきたいと思ひます。

LFグループの会員数は、この数年のあいだにずいぶん増加し、ついに600名を越しました。長期予報に対する関心が非常に高まっていると思われませんが、同時に「グロースベッター」の内容がこのところ難しくなりすぎているのではとも感じます。「グロースベッター」は会員の皆さんの自由な情報交換の場であるわけですから、オリジナルな論文だけでなく、こんなおもしろい論文を見つけたとか、話を聞いた、経験をしたといったエッセイも大歓迎します。短いものでも結構ですのでしどし投稿してください。

(山田)

平成元年度グロースベッター役員

(筑波大学) 安成 哲三 (気象研究所) 谷貝 勇
(長期予報課) 新田 勅, 中村 和信, 上野 達雄, 河原 幹雄, 栗原 弘一,
山田 真吾(庶務担当), 小泉 耕, 三浦 芳敬(会計担当)